

(社会教育との連携)

学校教育と博物館との連携をめざして

お茶の水女子大学附属小学校

田 中 千 尋

- I. はじめに
 - 1. 博物館の再認識
 - 2. 内容の骨子
- II. 序 論
 - 1. 「博物館法」による規定
 - 2. 教育改革の精神から読み取れること
 - 3. 博物館に対する教師のイメージ
- III. 最近の博物館の動向
 - 1. 博物館側の学校に対する考え方
 - 2. 体験型展示の増加傾向
 - 3. 移動教室・バス送迎などの試み
 - 4. 標本貸出・教師向け手引書の発行
 - 5. 教師向けの研修制度
 - 6. 地域の博物館の特性の理解
- IV. 本校の実践例
 - 1. 博物館利用のパターン
 - 2. 基本的な考え方
 - 3. 活動にあたっての留意事項
 - 4. 学習ノート of 試作
 - 5. 学習ノートの内容・使い方
 - 6. 博物館での児童の姿
 - 7. 人と人との関係の創造
 - 8. 他の博物館での試み
- V. 他校の実践例
 - 1. 台東区立根岸小学校の実践例
 - 2. 岐阜県岐南町立北小学校の実践例
- VI. 学校教育と博物館との望ましい連携の姿
 - 1. 教師の意識改革
 - 2. 博物館への積極的な働きかけ
 - 3. 「学校学芸員」の構想
 - 4. 開かれた博物館
- VII. おわりに

- ・この文章は、平成5年度・第56回教育実務指導研究会（平成6年2月開催）の研究同人発表における発表原稿を、紀要原稿用に修正執筆したものです。従って、文章中、多少読み辛い表現があると思われることを、お詫びいたします。そのことをお含みの上、お読み頂ければ幸いです。

I. は じ め に

1. 博物館の再認識

教育は、学校教育・家庭教育・社会教育の3つに大別できる。ともすればわれわれ教師は、この社会教育の存在を忘れがちである。私は、かねてから、学校教育と社会教育、特に博物館とは、互いに連携し、その特性を生かしあうことが大切であると考えていた。この文章が、博物館の長所を再認識し、学校教育の現場において、最大限に活用して頂くための手助けになれば幸いである。

2. 内容の骨子

項目は大きくわけて5つある。

まず第一に、学校教育と博物館との連携について、序論を述べる。ここでは、博物館の機能・連携の必要性や有効性、教師や児童の意識について述べたい。

第二に、最近の博物館の動向について。ここでは、博物館側の学校教育に対する考え方や、最近、増加の傾向にあるさまざまな教育普及活動を紹介したい。

第三に、本校の実践例を紹介する。本校は、博物館に恵まれた環境に位置することから、それらを利用した活動も多く取り入れている。その中から、特に国立科学博物館を利用した活動を中心に例をあげて述べたい。

第四に、他校の実践例を2つ紹介する。

最後に、望ましい連携の姿について提案し、この文章のまとめとしたい。

II. 序 論

1. 「博物館法」による規定

「博物館法」では、「歴史、芸術、民族、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をする機関（以下省略）」と規定されている。一般的に、博物館には、〇〇博物館をはじめ、資料館、科学館、美術館、動物園、植物園、水族館などの諸施設も含まれる。

一方、博物館法の別の項には「学校・図書館・研究所・公民館等の教育、学術または文化に関する諸施設と協力し、その活動を援助すること。」とある。また、その第2項には、「博物館は、その事業を行なうにあたっては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助し得るようにも留意しなければならない。」と定められている。

2. 教育改革の精神から読み取れること

今日叫ばれている教育改革の骨子は、①個性化、②変化への対応（国際化・情報化）、③生涯教育体系への移行、の3点に集約することができよう。このことだけを見ても、学校教育が社会教育施設を活用する意義が十分うかがえる。最近の博物館の動向を見ても、展示・研究といった従来考えられてきた機能よりも、教育普及活動にウエイトを置く館が急増する傾向にある。優秀な学芸員を配置し一人でも多くの子供（むろん大人も）に利用してもらおうと、大変な努力をしている姿が見られるのである。

3. 博物館に対する教師のイメージ

ところが、我々教師が博物館に対していただいているイメージはどうだろう。アンケート調査によると、マイナスのイメージが依然として強いことがわかる。難しい・古い・暗い・自分の知らないことが多い・専門的すぎる・ほこりっぽい・堅苦しいなど。同じ調査を児童に対して行なっても、ほぼ同じ傾向があらわれる。一方、少数ではあるが、プラスのイメージを持つ人もいる。豊かな気持ちになれる・操作できることが増え、学習環境としても整ってきた、など。しかし、まだ博物館に対する教師の関心は薄い。「教育は学校で」という学校中心の考え方が、教師の中に根強く残っていることは否定できない。

Ⅲ. 最近の博物館の動向

1. 博物館側の学校に対する考え方

さて、博物館側では、どのような考え方で取り組んでいるのだろうか。最近の動向を見ると、明らかに学校をターゲットにした教育普及活動に力を入れている館が、目立って増える傾向にある。

学校五日制への対応もその一つである。土曜休業日を無料開放したり、特別教室を開いている館の例として、狭山市立博物館・岐阜県博物館・浜松科学館・京都市青少年科学センター・和歌山市立子ども科学館・北九州市立交通科学館等、多くが挙げられる。



2. 体験型展示の増加

自然科学系の博物館では、小・中学校の指導要領に沿って、具体的操作を伴った展示に力をいれた館が大幅に増えている。国立科学博物館の「たんけん館」や盛岡市子ども科学館等、先進的な例といえる。これらは、学校教育側から見て、おおいに歓迎することであり、十分な研究・活用が期待される。

しかし、多くの博物館の中には、指導要領に準拠することにこだわりすぎるあまり、博物館本来の独自性を失ってしまったり、肝心の実物展示に極めて乏しい、いわゆる、「標本のない博物館」が生まれている等、必ずしも歓迎できることばかりともいえない。

3. 移動教室・バス送迎などの試み

学校向けの移動教室という形の援助も試みられている。北海道滝川市美術自然史館・東京北区北とぴあ科学館・板橋区立教育科学館・広島市子ども文化科学館等、多くの館がすでに実施しており、こんご増加する傾向にあるようである。

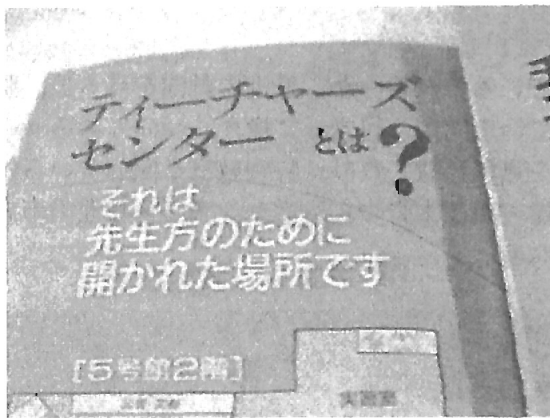
広い地域をかかえる地方の博物館では、館所有のバスを持ち、学校向けにバス送迎を試みているところもある。いわき市石炭科学館では、「いわき市石炭科学館号」というバスがあり、市のすみずみまで学校団体の送迎をしている。小山市立博物館でもこの例がある。博物館利用が促進されない原因の一つが団体交通の不便さにあるだけに、今後こうした試みは、自治体レベルで大いに普及がのぞま

れるところである。

4. 標本等の貸し出し・教師向けの手引書

また、先進的な試みとして、学校への標本等の貸し出しを行なっている館もある。国立科学博物館・宇都宮市昆虫科学館・倉敷市昆虫科学館が良い例で、理科授業・校内展等で大いに活用が望まれるものである。しかし、まだ実施している館がほとんどないこと、手続きが大変煩雑で、実際手元に到着するまでに、時間がかかること等が難点である。

このほかにも、独自の教師向けの手引書や学校向けの案内を発行している館もある。交通博物館・ガスの科学館・福井市自然史博物館・トヨタ博物館・大阪市自然史博物館・伊丹市立博物館等がその例である。



5. 教師向けの研修制度

最近の博物館の学校教育への働きかけで、特筆すべきことに、教師向けの研修の充実があげられる。これは、学校の教師の博物館への理解・資質向上を、主たるねらいとしたもので、テーマも「博物館の学習の場としての活用法」から高度に専門的な知識・技能を習得する講座まで、幅広く実施されている。

教師向けの講座を持つ館として、札幌市青少年科学館・栃木県子ども総合科学館・館林市子ども科学館・観音崎自然博物館・神戸海洋博物館・宮崎科学技術館等、多くがある。鳳来寺山自然科学博物館では、教員の初任者研修の中にこの館を利用した研修が組み込まれており、博物館への理解向上という点で、効果が期待される。

こうした様々な研修制度の中でも、特に注目したいものが、国立科学博物館の「ティーチャーズ・センター」である。これは、主に教員を対象とした常設研修施設で、要望に応じて、様々な実験・研修・実習を専門の職員とともにできる、という画期的なものである。徐々に利用が伸びているということで、他の館でも試行が望まれる。

6. 地域の博物館の特性の理解

児童一人ひとりの興味・関心に応じた主体的な課題追求学習を展開する上で、博物館はこのうえない教育施設といえる。われわれ教師は、まず地域の博物館の特性をよく理解し、より有効な利用の方法を模索する必要がある。

先に述べたような様々な教育普及活動の情報を積極的に収集し、十分検討の上、学習活動に活用していくことが大切なのである。その為にも、学校教育と博物館とはより緊密な連携が必要と考えられるのである。

IV. 本校の実践例

1. 博物館利用のパターン

東京では4.2 平方キロに1館の割合で博物館がある。これは、およそ小学校15校に1館ある計算になる。本校もその点では、大変恵まれた環境に位置するといえる。

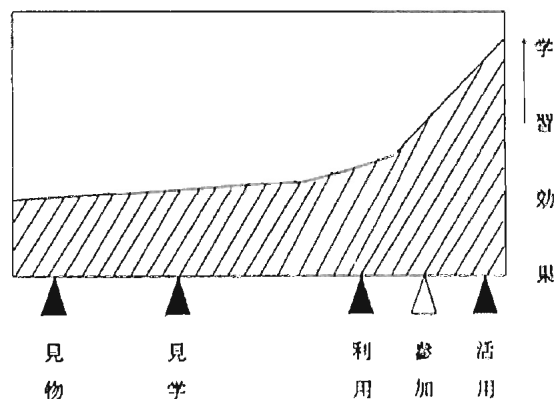
活動形態としては、①社会・理科をはじめとする教科学習の一環としての利用 ②課題選択学習での利用 ③自主学習での利用 ④帰国児童学級の国際科での利用 ⑤児童休業日の有効活用 等に大別できよう。

2. 博物館利用の基本的な考え方

まず、博物館を利用した学習活動を展開する場合の、基本的な考え方について述べたいと思う。

第一に、博物館の施設自体をクラスルームや理科教室と同じ、学校の教室の一つと考える。次に、博物館は「見物」や「見学」をするところではなく、「利用」或いは「活用」する、「学習の場」であるということである。下図のように「見物」から「活用」に変化するに従い、高い学習効果が期待されるわけである。

こうした考え方から、私は、「博物館見学会」ではなく、「博物館利用活動」と呼び、児童にもそのことを意識させるように努めている。



3. 活動にあたっての留意事項

「博物館利用活動」にあたっては、特に次のような事項に留意すべきである。

- (1) 遠足のついで、雨天対策といった次元の低い利用形態ではなく、学習の一環として、計画的な活動を心がけるべきである。
- (2) 必ず、事前指導・準備学習を行い、各自または各グループの研究・学習テーマを設定して、個々のめあて・目的をできる限り明確にする。その為には、博物館職員との事前打ち合わせが不可欠である。これは、学校団体が博物館を利用した学習を展開する上で、最も基本的なことなのだが、残念なことに、この大切なプロセスが軽視されているのが現状のようである。
- (3) 参考資料・ワークブック・学習ノート等は、教師自らまたは児童との協力で作成し、児童の興味・関心や実態に即したものを準備する。このためには、教師自身の事前研究が重要であることは言うまでもない。
- (4) 博物館での行動は原則として自由行動とする。その際、安全には特に注意を払い、展示物の破損や、事故がおこらぬよう十分配慮する。欧米の先進国のように「ミュージアム・ティーチャー」が存在しない我が国では、博物館利用のモラルやマナーの指導も引率の教師の責任ということを忘れてはならない。
- (5) 保護者にも協力を呼びかけ、国立科学博物館のように建物・フロアの広い博物館では、要所要

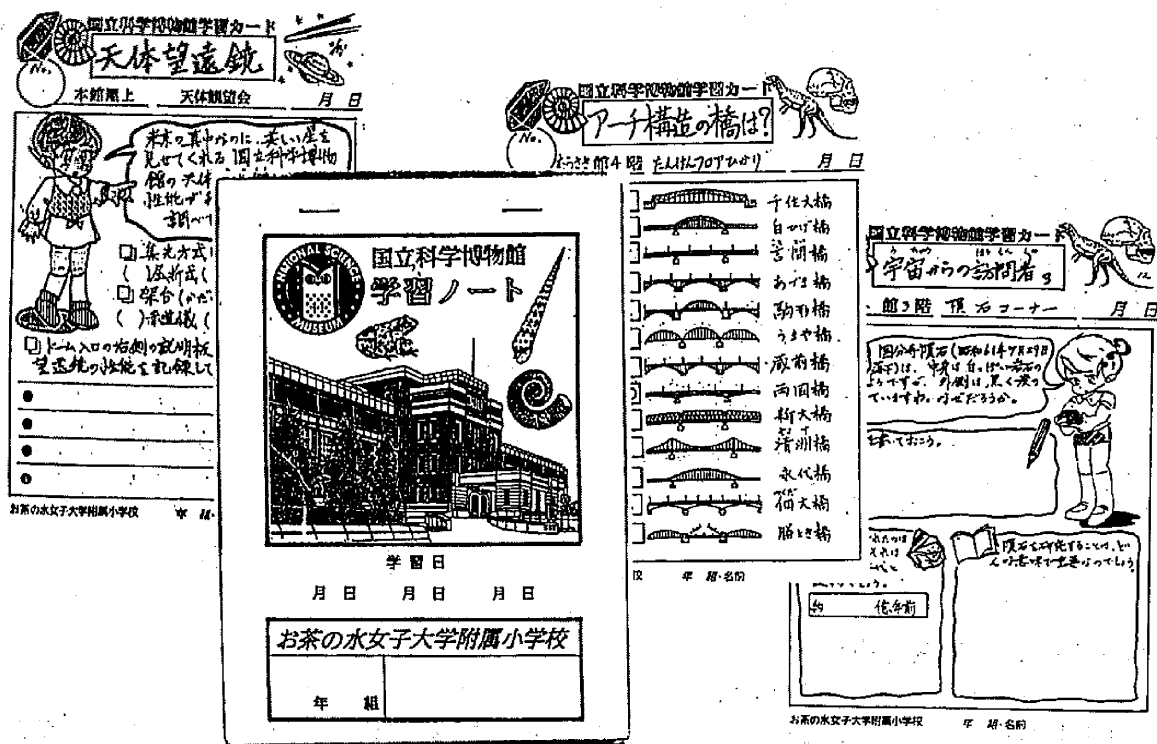
所で指導にあたってもらえる等の配慮も必要である。

- (6) 一過性の「見学」的な利用にとどまらず、発達段階に応じて、計画的に利用させることが望ましい。また行ってみたいと思うような活動を大切にすること。「今、この博物館に行くこんな特別展をやっていますよ」とか「この学習は、この博物館へ行くといろいろなことがわかりそうですね」といった、授業中でのちょっとした働きかけも、思いの外効果がある。

4. 学習ノートの試作

自主学習の一環、或いは、土曜休業日の有効活用などで自主的に博物館を訪ねるような児童は、およそ目的やテーマがはっきりしている為、博物館で何を学習するべきかだいたい把握しているのが普通である。しかし、どう利用したらよいかわからない、どこに何があるのか見当もつかない、といった児童も見られる。こうした児童には、まず、博物館がどのような学習に役立つのか、そして、どんな利用・活用の方法があるのかを正しく伝え、興味を抱かせることが先決であろう。

こうした考え方から、本校の児童が最もよく利用し、身近な博物館の一つでもある、国立科学博物館を例にとり、「博物館学習ノート」なるものを試作した。



5. 学習ノートの内容・使い方

まず、小さな工夫の一つが、表紙の日付欄である。日付を記入する欄が一つではなく、複数にしてある。これは、意図的にこのようにしたもので、一回だけでなく、自分の課題の探求が終了するまで何度でも足を運び、学習してほしいという思いを、児童に伝えるための工夫である。

現在のものは、試作品といった感じのもので、内容も不十分であるが、将来は、児童の編集委員と協力して、「自然史編」、「進化編」、「環境編」、「宇宙編」、「科学技術編」等、分野ごとに分冊とし、より充実した活動に使えるよう改良を加えたいと考えている。

この学習ノートの使い方は、児童の自由に任せられている。1ページ目からコツコツ取り組むもよし、自分の研究テーマに沿った部分だけを集中して活用するもよし、まったくの参考資料として使うのもよし。つまり、児童の個性や興味・関心、研究テーマ、学習内容などに応じて、活用方法は児童自身がみつければ良いわけで、特にこのように使いなさい、と決まっているわけではない。

もう一つの小さな工夫として、携帯用折畳み椅子の持参があげられる。これは、本校が校外学習用

におよそ学年の人数分常備しているもので、折り畳むと児童の手提げ袋にも入り、アルミ製で非常に軽量である。私は、博物館を利用した校外学習には、できるだけこの椅子を持たせるように心がけている。特別に椅子や机のない博物館では、これは大変有効で、落ち着いてじっくりと記録を取ることができる。児童にとって「記録」は本来非常にわずらわしいことの一つである。こうした、細かい工夫も学習成果を左右する要因の一つであることを忘れてはいけない。〈下写真〉



6. 博物館での児童の姿

では、実際に博物館では児童はどのような活動をしているのか、国立科学博物館での児童の活動の様子を紹介することにする。

学習の標準的な持ち物は上写真のようになる。できる限り軽装備で、身軽に動き回れ、疲れさせないことが大切である。前項の折畳み椅子は常に持参させ、必要に応じ、使用は各人の自由に任せておく。しかし、混雑が激しい場合や、展示や説明・演示が高い位置にある場合は、立ったまま記録を取ることもしばしばある。そのようなことを想定して、学習ノートの裏表紙は厚紙になっており、そのまま下敷きなしでも、立ったままでも記録がとれるよう工夫してある。

子ども同志の相互啓発が多く見られるのも特徴の一つである。「もの一人」といった無機的な関係にとどまらず、「ものを仲立ちとした人と人との関係」が見られるようになったことは、研究の一つの成果といえると思う。

次ページ写真の男子児童はこの博物館に毎週のように通っている為、展示内容について大変詳しく周りの友達に解説をしたり、教師顔負けのミニ授業まで展開してしまう場面もみられた。こうした姿も博物館を利用した学習での児童の「あるべき姿」と考えている。

具体的操作や実験・観察のできる場面の多いこの博物館では、児童は一日中あきもせず意欲的に取り組む姿が見られる。特に決まった課題を持たない児童でも、実物展示や具体的操作のあふれた博物館では、自ら課題を見付ける力が育ってゆくと考えられる。

7. 人と人との関係の創造

本校の実践で最も特徴的なものとして、博物館職員の方との積極的な交流が挙げられる。国立科学博物館には、教育部の職員・普及員の方々をはじめ、多くの教育ボランティアがいて、各展示セッションごとに解説・質問の回答にあたる等の教育活動を展開している。児童は何回も博物館に通ううちに、それらの人々の顔や名前も覚え、「あの博物館へ行こう」という気持ちだけでなく、「あの先生に会いに行こう」という気持ちも持つようになる。

このような関係は注目すべきで、「博物館の先生も学校の先生の一人」ぐらいに考えてくれることが理想的な姿ではなかろうか。しかし、こうした「人と人との関係」の創造は、一日二日でパッとできるものではなく、学校現場・博物館相互の理解と、計画的な協力体制が不可欠であり、多くの時間と努力を要する。



8. 他の博物館での試み

本校にはこの他にも、科学技術館・文京ふるさと歴史館・小石川植物園を積極的に利用した活動が恒常的に試みられ、それぞれの館・園の特色を生かした学習の展開を模索している。国立科学博物館の項で紹介した「学習ノート」もそれぞれの館・園のものを作成し、ケースバイケースの活動に対応できる体制を整える努力をしている。

この中でも、小石川植物園（東京大学理学部附属植物園）は、小学校から徒歩圏内にあることもあり、低学年から高学年まで、系統的に指導計画に取り組み、様々な学習活動を展開している。

[illegible]

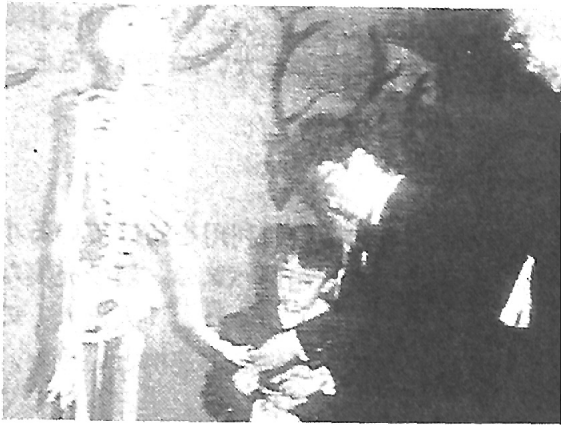
V. 他校の実践例

1. 台東区立根岸小学校の実践例（平成4年度）〈下左写真〉

本校の実践の一端がおわかり頂けたと思うので、博物館との連携を目指した、先進的な他校の実践例を2例紹介したいと思う。

その一つは、本校と同じく、国立科学博物館を利用した東京都台東区立根岸小学校の三上教諭を中心とした実践例である。これは、3年理科の単元「わたしたちの体」の学習で、14時間のうち2時間を博物館施設内で行なうという斬新なもので、博物館側との連携と全面協力という形で実施された。児童の学習目的に応じて3つのコースを設定し、それぞれのコースに博物館職員がつき、授業・学習

を展開するという形態である。博物館の施設や人材を積極的に活用した、課題選択学習の学習形態の先進的事例として、また、学校教育と博物館との連携の在り方を模索してゆく上で、大変貴重な実践例と位置づけられよう。



2. 岐阜県岐南町立北小学校の実践例（平成4年度）〈上右写真〉

もう一つの事例として、岐阜県岐南町立北小学校の千藤教諭の実践例がある。これは、平成4年度の長期研究の一環として実施されたもので、その研究成果は長期研究報告書として詳しくまとめられている。北小学校では、岐阜県博物館を利用した活動を、昭和63年度からカリキュラムに取り入れ、博物館と連携した積極的な活動を展開している。活動の流れとしては、教育普及官との打ち合せ・事前下検・学年会による教師相互の理解・自作資料の作成・児童への事前指導・事後の学習発表会など単なる「見物」や「見学」から脱却し、博物館のより良い有効活用を目指す力強い姿勢がうかがえるのである。

この報告の中で千藤教諭は、何よりも我々教師が博物館についての理解を深めることが、何よりも先決で重要であると強調している。私も全く同感である。

VI. 学校教育と博物館との望ましい連携の姿

1. 教師の意識改革

最後に学校教育と博物館との望ましい連携の姿について提案し、この文章のまとめとしたい。

本校の実践を通じて、そして多くの博物館職員の生の声を聞いて感じることは、なによりもまず我々教師が博物館というものに対して、意識改革をする必要があるということであろう。平たくいえば、博物館側の努力や研究成果が、学校教育に期待どおりに生かされていないということである。まずは情報収拾に努め、学校教育における博物館のより効果的な活用方法を研究してゆく必要があるのではなかろうか。

2. 博物館への積極的な働きかけ

学校教育と博物館との将来的な望ましい姿として、具体的に次のようなものが挙げられると考えている。

まず、地域の博物館に学校現場から積極的に働きかける姿である。現在、学校で利用する博物館のほとんどは、「自治体立」のものである。それらの博物館が作ったもの・考えたものをただ受動的に利用するだけでなく、学校現場から、「このような展示・企画をしてほしい」といった要望をもっと積極的にはじめてよいと思う。

合わせて、教材やカリキュラムを協同開発することも重要な要素だと思う。その為には、両者が相手の状況を的確に把握することがまず先決で、連携する領域を十分検討し、役割を分担しあうべきであろう。

3. 「学校学芸員」の構想

学校から団体で博物館へ行くといった一方通行の活動だけでなく、博物館の専門職員を学校へ招き授業をしてもらうという発想もある。理想的な姿としては、1週間のうち何回か、博物館の先生の授業がある、或いは、司書教諭と同じように、学校にも学芸員が常勤（地域の複数の学校で1人でも良い）している、といった姿も考えられる。しかし、現段階では制度上大変むずかしく、実現は事実上困難と言わざるをえない。今後先進的な実践が試みられ、将来実現するものと大いに期待するところである。

4. 開かれた博物館

教師の一人として、私が博物館に要望したいことも多々ある。学校の博物館利用を妨げている小さな要因をたくさん感じるのである。学校団体の入館料免除・減免の促進、送迎バスの一層の充実などもその例である。しかし、一番要望したいことは、より「開かれた博物館」つまり、「人與人」の関係を重視した博物館づくりを目指してほしい、ということである。学校と博物館の連携というと、ともすれば、「施設と施設の連携」ととらえられがちであるが、私はそうは思わない。子どもにしても教師にしても、あの博物館のあの人に相談してみよう、と気軽に足を運べるような環境作りを目指してもらいたいのである。

更に、希望することは、様々な情報を収集し、幅広く提供する「情報ステーション」の役割も模索・研究してほしいということである。パソコン・FAX・ISDN（光通信テレビ電話）などのメディアを通じて、博物館ならではの情報を教育現場に即生させるシステムを開発することはできないだろうか。

VII. お わ り に

私の乏しい実践の中から考えを述べたに過ぎない、甚だ不完全な文章ではあったが、これを機に、一人でも多くの先生方が、博物館というものを再認識し、そのより効果的な活用方法を模索され、ゆくゆくは、学校教育と博物館とのより望ましい連携の姿を求めて頂ければ幸いである。

学校と博物館の関係はゆきつくところ、「人與人との関係」だといえる。私も、そのことを再認識し、更に研究を続けたいと考えている。

最後に、貴重な資料を提供して下さった、諸先生方、諸施設の方々に感謝いたします。

◆参考文献

- ・伊藤寿朗、森田恒之 「博物館概論」 学苑社 1978
- ・諸澤正道 「開かれた博物館をめざして」 国立科学博物館 1991
- ・日本博物館学会 「博物館学入門」 理想社 1956
- ・加藤有次 「博物館学序論」 雄山閣 1977
- ・広瀬 鎮 「博物館はいきている」 NHK 1972
- ・日本博物館協会 「全国博物館大会報告」 1975-1978
- ・小林文人 「社会教育職員論」 東洋館 1974
- ・日本博物館協会 「全国博物館総覧」 ぎょうせい 1978
- ・国立科学博物館 「教育用標本利用の手引き」 1992
- 「研修研究館、学習利用の手引き」 1992
- 「博物館ニュース 296号・博物館と学校」 1993
- 「展示案内」 1994
- ・博物館学雑誌 15巻1-2合併 塩川友弥子 「学校教育と博物館」 1990